

『猛々しさと涼風を求めて』

“夏のアラスカ満喫の旅 7 日間”

[ルック JTB]

出発 平成 19 年 8 月 13 日 (月)

添 乗 員：中島紀子さん

帰国 平成 19 年 8 月 19 日 (日)

現地ガイド：小黒舞舞さん

いろいろ迷った今回の旅行であるが、先輩の岩田先生からいち押しされたアラスカとなった。6000mを越えるマッキンリーの麗姿や野生動物の観察、そして氷河の崩壊状況の視察・確認といった環境問題も頭をかすめる重い使命を担った旅であるが、とにかく猛暑の日本を飛び出したい！

8 月 13 日 (月) 東京 晴れ、アンカレッジ 晴れ

15 時 45 分に I カウンターに集合ということで、その 30 分ほど前に第 2 ターミナルに到着した。受付を済ませて再集合となり、添乗員さんの説明となった。アメリカの入国審査の際の指紋検査（左手の人差し指から）と写真撮影について、渡されたイヤホンガイドが 3 万円もするので紛失しないように等といった注意があった。今回のツアコンは中島紀子さん。清楚な感じで、鷗外の『雁』に出てくる無縁坂のお玉のイメージがあった一映画では若尾文子が演じたことでもわかるように美人系ということである。中島の‘島’は濁らない発音であることを強調していた。パーティーは 31 名もいて、1 人参加は僕以外にもう 1 人ということであった。

17 時 15 分になると、83 番ゲートからの搭乗がスタートした。滑走路の混雑により 17 時 45 分発 JL8802 便の離陸は 30 分以上遅れたが、直行チャーター便は 2 回の機内食をはさんで日付変更線を越え、アラスカ時間 13 日の朝 7 時 40 分にレッド・スティーブンス・アンカレッジ国際空港に着陸した。6 時間半のフライトであった。アンカレッジ時間は日本より 17 時間遅れだが、アラスカでは日本より 7 時間早くて 1 日遅れということになる。

事前の案内のように入国審査に時間がかかり、8 時 20 分に入国完了となり現地ガイドの舞舞（むむ）さんに迎えられた。彼女は幼い頃をチリで過ごしたというが、エアロビのインストラクターのような締まった体型で、彫りの深いラテン系美人であった一チリと言えば、中高生時代、アルゼンチンのメンドーサ市の女の子と文通をしていたことを思い出した。同じ JTB のパーティーでは一番乗りの入国となった。空港は日本人が多かったが（JAL のチャーター便が着いたのだから当然!？）コリアンが多いのにはビックリした。入国手続に手間取る方もいて 30 分ほど待たされたが、その間は任天堂 DS（もっと脳トレ）で暇

つぶしをした。大きな白熊の剥製が展示されていたがアラスカらしかった。

空港を出るとちょっとヒンヤリした空気が嬉しく、朝の陽射しがまぶしかった。



(空港では白熊の剥製とヘリコプターが迎えてくれた)

9時3分にバスが出発したが、空港正面に見える凸形の山々が印象的であった。これはチュガッチ山脈で、チュガッチとは原住民の言葉で雨が多いという意味だという。アラスカにはこの他、中央アラスカ山脈、北ブルックス山脈の3つの山脈が走っているとのこと。ドライバーは太めのハワードさん。彼をはじめ、こちらはメタボの人が多いが、アラスカの厳しい寒さに耐えるためには厚めの脂肪が必要なのだろうと思われた。

高い青空に小さな自家用飛行機がたくさん飛んでいたが、見てみると、とても爽やかな気分になった。こちらでは50人に1人の割合で自家用飛行機を持っていて、これは全米で最高であり、フッド湖とスピナード湖の二つの湖の間には人工の水路が設けられていて、世界有数の水上飛行機の発着場として有名であるという。夏のオンシーズンには1日に800機くらい発着があるとのことである。アラスカでは小型飛行機が自家用車代わりに使われている様子がよく分かった。バスはその水路の脇に停車して飛行機の発着を待ったが、残念ながら、発着する様子を間近に見ることはできなかった。



(この飛行機は30年ものだという)



(たくさんの水上飛行機が停留していた)

その代わり、飛行機を掃除している白髪のおじさんがいたので、早速話しかけてみた。1945 年生まれというこの男から、“お前はツアーのガイドさんか？その英語はどこで勉強したんだ？”と質問され、“日本では中高で 6 年間も英語を学ぶから、英語のグッドスピーカーが多いんだよ”と返した。フロートだけで安くて 200 万円もするから、入念に手入れをしていると話していた。また、自家用飛行機の駐機代は月 \$ 130 くらいだという。水辺には白いノコギリ草、ピンクのヤナギランが咲いていた。

アメリカの 49 番目の州であるアラスカは、日本の 4 倍もの面積があるにもかかわらず人口は 66 万人ほどで、そのうちの 42%に当たる 26 万人がアンカレッジに住んでいる。第 2 の都市がフェアバンクスで人口 8 万 5 千、州都はジュノーである、湖と池は 300 万個以上ある。全面積の 5 %が氷河で、氷河の北限がアラスカ山脈の北側くらいで、…等の説明が舞舞さんから続いた。

また、アラスカの樹木についての説明があり、シロトウヒ、クロトウヒ、シラカバ、ポプラ、ヤナギなどが見られるという。ムース（ヘラジカ）は大きなオスで 700kg もあるという話を聞きながら、9 時 35 分に地震公園に到着した。

クック入江の面した斜面にあるこの公園は、1964 年にアンカレッジ一帯を襲った大地震を記念したもので、入口左手には市長の名前を冠した“TONY KNOWLES COASTAL TRAIL”の看板があり、この径はサイクリング・ロードもなっていて、冬になるとクロスカントリーで使用されるという。右手には“Welcome to Earthquake Park”というカラフルで小さな案内があった。



木陰や日陰はヒンヤリして、半袖では少し寒いくらいであったが、アラスカにきた実感が沸いて来た。小径を 500m ほど歩くと、三角形のモニュメントが見えてきた。1964 年というと東京オリンピックの年だったけどー僕は小学 1 年生であった！ーその開催前に大きな地震があったことを初めて知った。日本同様、アラスカも環太平洋地震帯に属しているから、地震が多いのだろうと思われた。そのときに崩れた斜面がむき出しになっていたが、木々が茂り始めている様が 40 年以上の年月の経過を感じさせた。見晴台からはマッキンリーやフォーレイカーなどの雪化粧した山々が、遥か遠方に美しく連なっているのが眺められたが、アンカレッジ市内から見える日は珍しいということで、たいへんラ

ッキーであった。見晴台には“Riches of the North”の案内板に可愛いサーモンやベルーガが描かれていた。



(地震公園のモニュメント)



(見晴台からは遥か彼方にマッキンレーを望めた)

バスに戻って、中島さんから枕銭は\$ 1くらい、航空券の残りは大事に保管するように等の説明を聞いていると、バスはアンカレッジのIストリートに進んだ。この辺りにある小さな家は開拓時代からのもので、玄関が突き出ている構造は寒い風がいきなり家の中に入ってくる来ないように工夫されたものであるとのこと。アンカレッジ市街の道路は碁盤の目のようになっていて、東西に1st Ave.、2nd Ave.とかが走り、南北にA st.、B st.とかが延びている。4番街・5番街あたりにしか店が無いとのことだが、アラスカを代表する街にしてはちょっと閑散として寂しい感じがした。

まもなくアラスカ鉄道のアンカレッジ駅に到着してトイレ休憩となった。



駅前には初期の頃に使用された蒸気機関車が飾られていて、その前を超大型のトラックが走っていて、ヒルトン・ホテルが高く聳えていたのが印象的であった。

続いて、バスでちょっと走ってレゾリューション公園に到着した。キャプテン・クックが乗っていた船レゾリューション号に因んで命名されたこの公園は、クック入江に面しており、対岸には雪を頂いたアリューシャン山脈が白く美しく、

まるで蜃気楼のような感じに見えた。ちょっと雲がかかったスシトナ山も美しく眺めることが出来た。スシトナ山は女の人が横たわっているように見えるというが、そう言われれば何となくそんな感じもした。クック入江を見下ろすようにキャプテン・クックの銅像が建っていた。



(アリューシャン山脈とスシトナ山～光学3倍ズームではこれが精一杯！)



(正面観は逆光のため不鮮明なので、後ろからも失礼！ サンドウィッチは超ビッグ！)

バスの中では、舞舞さんから種々の説明があった。キャプテン・クックは最初に訪れたハワイでは原住民に大歓迎されたが、2度目に訪れた際に殺されたということだが、これは最初の訪問で病気を置いていってしまったため、疫病神と思われて殺害されたそう（原住民は免疫力が乏しかった）。アラスカはアメリカからの旅行者が多く、そのほとんどがリタイアした年配者ということである。また、今の時期のアンカレッジは日の出が5時半、日の入りは22時半頃とのこと。夏至の6月21日は日照時間が19時間半にもなるとのこと。初雪は10月10日前後で、雪解けは4月。雪解けの時期の街は汚いので、彼女はこの時期に日本に帰るのだそう。もちろん、桜もお目当てということであった。冬至の頃は9時に日の出。14～15時には日の入りを迎え、それを境に1日7分ずつ日が長くなっていくとの話であった。

11時から市内の Sea Galley というシーフード・レストランで昼食となった。シーフードかと思ったら、サラダバーとサンドウィッチであった。

11時55分にバスは出発し、シップ・クリークに向かった。アラスカでは釣り

をするのに免許が必要とのことだが、この免許はスーパーマーケットやGSでも売っており、お金で購入できるという。州民は\$23/年だが観光客は1日\$20という。また、キングサーモンは年間5匹までという制限があるとのことであった。アラスカでは釣りをスポーツとして捉えて、きちんとしたルールがあって、罰則は\$200とかにもなるそう。例えば、ちゃんと釣らずにエラや尾に引っ掛けたりするとダメで、必ずリリースしなければならないとのことであった。また、こちらの人はイクラを食べずに捨ててしまうか、犬の餌にしてしまうそう（もったいない！）。川辺で内臓とともに捨て去られたイクラは、カモメが食べに来るということであった。

サーモン（サケじゃないよ、サーモンだよ！）は稚魚として半年～1年を川で過ごし（このときに川の臭いを覚える）、種によって異なるが1～4年くらい海に出るが、4000匹のうち2匹くらいしか生まれた川に戻れないという。その他のアラスカの魚ではオヒョウ（ハリバット）が有名であり、また、アラスカ産の野菜・果物はほとんどないという話であった。

シップ・クリークには15分程で到着した。今の時期に見られるというシルバー・サーモン（銀鮭）が、橋の下にウヨウヨいて、円を描くように泳いでいた。



（間近に見るシルバー・サーモンに、釣りがしたくなかったけど・・・）

川辺には黄色のツンドラ・ローズ色が目についた。下流方向にロープが張られていて、それより向こう側が釣り場になっているというが、この辺りは上級者向けの釣り場であるそう。

12時22分にバスは発車し、途中、スーパーマーケットでの休憩をはさんで、一路、タルキートナを目指して出発した。舞舞さんからスモークサーモンやイクラ等の車内販売について説明があり、更にアラスカのおみやげとして、シーフードの他にジャム、ジャコウ牛の毛糸（カシミヤより8倍暖かい）、ヒスイ、マンモスの牙製品、毛皮等の話が続いた。セイウチの牙の彫刻品はワシントン条約によって禁止されていることが付け加えられた。

50分程して、ワシーラという町にあるFred Meyerというスーパーマーケットに到着した。ここはアンカレッジから1時間位なのでベッドタウンにもなっ

ている、人口 6 千人くらいの小さな町である。広い駐車場を歩いて店内に入ると、だだっ広くて田舎のマーケットらしさが感じられた。食料品から衣類、おみやげ品まで種々揃っていた。ケーキ屋さんには色の濃い、恐ろしく甘そうなケーキが陳列されていた。よく見ると、ケーキの上にスパイダーマンがいるものがあった。また、店内にあるゲームの景品が任天堂 DS やプレステ 2 だったのにはビックリした！



(Fred Meyer と店内にあるケーキ店のショーケース色の濃いケーキが怖い！！)



(スパイダーマンがいた！)



(DS やプレステ 2 が！)

14 時になって出発すると、すぐ右手にワシーラ湖が出現し、泳いでいる子供も見かけた。ワシーラはアメリカで一番ドッグフードが売れるということだが、これは犬ズリをやっている人が多いからという。犬ズリはアラスカ州のスポーツになっていて、毎年 3 月初旬に犬ズリレースがあつて、アンカレッジからベーリング海に面したノームという町までの約 2000 km を 3 週間ほどかけて行われているそうだ。これは 1924 年の冬、ジフテリアに効く血清をノームに運ぶのを忘れ、犬ズリでリレーして血清を届けたが、その教訓を忘れないようにレースが行われたのが始まりということらしい。犬ズリの犬は靴下を履かせるそうだが、結構たいへんという話であつた。

ハイウェイはアラスカ鉄道の線路に沿って走っていたが、鉄道が完成したのが 1923 年、ハイウェイは 1976 年ということである。アラスカ鉄道は州が経営しているが、物資を運搬するので黒字経営になっているそうだ。16 日にわれわれが乗る予定のデナリ～アンカレッジ間は鉄道で 8 時間かかるが、ハイウェイ

だと 5 時間弱だというのが、随分ノンビリ走るんだなあ、のどかなんだなあと感じた。

道端にはヤナギラン（fireweed）を見ることができたが、アラスカの多くの地域で見られるこの花は、山火の後、最初に咲くということであった。アラスカでは山火は結構多いらしく、実際、アンカレッジでは花火の販売を禁止しているという。

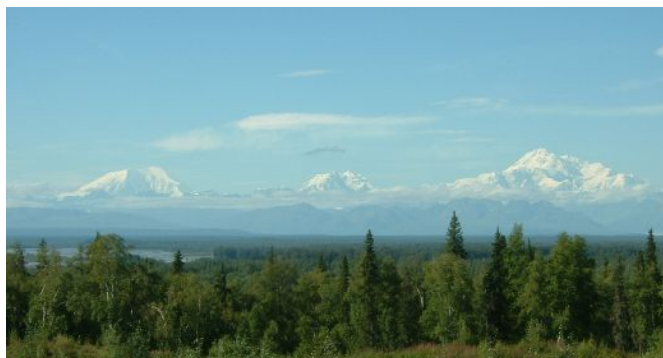
14 時 15 分にヒューストンという小さな町を通ったが、ここは花火屋さんが多く、独立記念日が近づくとアンカレッジから買いに来る人も多いそうだ。

14 時半にウィロー（Willow - やなぎ）という町に入ると、マッキンリーが見えてきたのでバスストップとなった。この町は人口 200 人ほどだが、かつてジュノーから州都を移そうという話があったという。



（ハイウェイの彼方にはマッキンリーが！）（ホテルの庭からも見事なパノラマが広がった）マッキンリーだけでなく、フォーレイカーとハンターもはっきり見ることができたが、夏にこの場所から見えるのは 25% の確率ということであった。

15 時半にタルキートナ・アラスカン・ロッジに到着した。中島さんからの 10 分程の説明の後、ホテルの裏手にあたる庭から見えるファイン・ビューを堪能した。部屋でシャワーを浴びた 17 時頃、ホテルの送迎バスでタルキートナの町に出かけた。町といっても、みやげ店など 10 軒程度しかないちょっと寂しい感じであったが、好天のせいで町全体が明るく感じられた。



（ロビーでは暖炉が活躍していた。左からフォーレイカー、ハンター、マッキンリー）

ロッジの巡回バスで町に行く際に、中島さんらと一緒にになり、舞舞さんが幼い頃過ごしたチリや東京の実家についての話を聞くことができた。



(抜けるような青空とロッジ)



(タルキートナのメイン・ストリートです)

タルキートナとは食料のある所という意味だそうだが、小さな町なので T シャツと絵はがきを購入すると後は何もなく、18 時過ぎにはホテルに戻った。ロビーには本日の日の出 5 時 56 分・日の入り 22 時 09 分・日照時間 16 時間 11 分というインフォメーションがあった。19 時からの夕食にはオヒョウが出たが、淡泊な味で今いちだった。

成田からアンカレッジ、タルキートナへと移動した長〜い一日であった。

8 月 14 火 (火) 曇り・雨

モーニング・コール (MC) の 6 時より大分早い 5 時半に目覚めてしまったが、鳥の鳴き声が心地よかった。空を見るとグレーの雲に覆われて、ちょっと寒そうな朝であった。ニュースでは、昨日より華氏で 10 度低い 16°C が今日の最高気温とか。華氏は摂氏°Cから 30 を引いて÷ 2 で計算できる。例えば、華氏 45 度なら、摂氏 7.5°Cということになる。

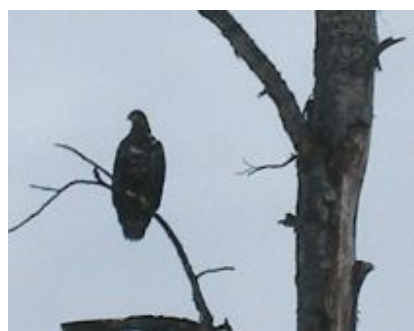
8 時 10 分にロビーに集合して、20 分にバスが出発した。45 分発のリバー・ボート・クルーズ船に乗り込むと、逞しい女船長のフィリーさんが迎えてくれた。スシトナとは砂の島の川という意味だというのが、確かに、砂でできた中州も見られた。スシトナ川の水は氷河の雪解け水のために冷たくて 0°C 近くて、濁った色をしていた。



(ガイドのコナーは NY から来ているとのこと)

隣席のミネソタから来たという二人連れの女性（オバサン）は、ビジネス（自動車関係）で東京と豊田に言ったことがあると話してくれた。

コナーの説明は、イヤホンマイクを通して舞舞さんの同時通訳で聞くことができた。倒壊した木を指さして、ビーバーによって齧られて倒れたとのことで、ビーバーの歯は一生伸び続け、ハコヤナギの木が好物と説明していた。少し進むとアメリカの国鳥となっている白頭鷲が視界に入ってきた。白頭鷲はアメリカに 35000 頭いるが、その半数がアラスカにいるとのこと。5 月に卵を産み 30 日で孵るという。目の良い鳥で 1.7 km 先まで見え、魚（サケ）が好物という。大きすぎるサケを取ってしまうと、爪が引っかかってしまってサケとともに流されて溺死してしまうワシも年間数頭いるそう。大きいものになると巣の直径は 2 m にも及ぶという。成長とともに頭が白くなっていくそう。



（川のほとりの木の上で、白頭鷲は悠然とした感じで佇んでいた）

川のほとりに見える木を指して、コナーから 4～5 月の雪解けの際にできるキズについて、また、12 月になると川が凍るので、その上をスノーマシンやモービルが利用する等の説明があった。アラスカ鉄道の線路が右手に続いて、その奥にはハンティング用のキャビンがいくつか見られた。船は早い速度で川を上っていったが、右手には澄んだチェイスクリークがあり、サケがたくさん遡上してくるという話であったが、スシトナ川は氷河の削れたシルトによって濁っているの、シルトを嫌うサケはちょっと少なめという話であった。

10 時になると下船ポイントに到着したが、鉛色の空からちょっと強めの雨が降ってきてしまった。まずは、ハナウドの種類やアメリカハナブキ等は触ってはいけないとの注意があった。ブラックベアが出てくる可能性があるとのことで、コナーはショットガンを抱えていたが、ちょっと緊張してしまった。この一帯には 20 種のヤナギがあり、ある種のはアスピリンの効果があるため、現地の人々は頭痛の際に噛むという。また、辺りにはヤナギランやクランベリー等が見られた。ビーバーのトラップでは、毛皮が重宝するだけでなく、肉は昔はヒトが食したが、今では犬ゾリ用の犬の餌ということであった。

避難用のシェルターに到着すると、ブラックベア、カウソ、セーブル、ミンク、レッドフォックス、コヨーテ、ビーバー等の毛皮を見せてくれた。昔は、

小さなキャビンを犬ゾリで転々としながら猟をしたということである。



(コナーの説明を舞舞さんが力強く通訳してくれたーキャビンと毛皮、食料貯蔵庫)

30 分程して船に戻った。右手にチュリトナ川 (大きな葉を持つ木の意の川) が見えた所で旋回した。チュリトナ川の方が水温が低いので、霧がかかっていた。スシトナ川から左に向かってタルキートナ川に入ったが、川の色が微妙に異なっている (黄銅色) のが確認できた。10 時 50 分にクルーズ終了。

ランチは植村直己さんが泊まった (5 号室) ことで有名なラティチュード 62 で。部屋数は 7 つ位あるとのこと。



(植村直己さんの写真が飾られていた)

マッキンリーは 4・5・6 月が登山シーズンで、登頂率は 50% だが、フォーレイカーは難しくて 25%。今年は 21 人中 1 人しか登頂に成功していないという。

12 時にホテルに戻って休憩となった。20 分の休憩の予定は、荷物が 1 個見つからないとのことで、2 時間もホテルのロビーで過ごすことになってしまった。昨日のように天候も良くないので、マッキンリー等の山々も見えず、退屈しのぎに DS をやったりして過ごした。また、悪天候とのことでマッキンリーの遊覧飛行は取りやめとなってしまった。天候と言え、このタルキートナのロッジは 5 月末から 9 月一杯までしか営業しないとのことであった。

14 時 45 分にバスは出発した。遊覧飛行代金 \$175 が返金となるそうだが、+ \$120 でデナリ山の遊覧飛行が可能ということで、明日の夕方の便の予約をお願いした。舞舞さんからマッキンリーの登山についての説明や、第 25 代大統領ウィリアム・マッキンリーに因んで命名されたが、地元ではデナリ山と呼ばれている等の話に続き、電線にある色のついたボールはセスナ等の自家用飛行機が分かるような見印になっている等の説明があった。

16 時 45 分に大分水嶺になっているサミット湖を過ぎたが、ブルーベリーを摘んでいる人を見かけた。アラスカ鉄道の線路に並行して進んだが、フェアバンクス 8 時 15 分発～アンカレッジ 20 時 15 分着が 1 日 1 本。9 月 15 日からは冬時間で週に 1 本になるという。

17 時にキャントウェルの町を通過したが、人口 100 人程の小さな集落で 1989 年に電化したばかりという。そのときにバーでテレビを買い、町の人々が集まって見ていると、ニュースで町長とバーの店長がお尋ね者であったことが分かったというユニークな話を舞舞さんが教えてくれた。悪いことをした人は北へ向かうという習性があるそうだ。さらに 17 時 3 分、左手にネナナ川が見えると、その右手のパノラマ山は形が似ているということで、マッキンリーのトレーニング用になっているという説明があった。

17 時 30 分にデナリ・プリンセス・ウィルダネス・ロッジに到着した。北緯 63° に位置するデナリは少しヒンヤリしていた。20 時からの夕食はビッグなローストビーフで満腹となった。

8 月 15 日（水） 小雨のち曇りのち晴れ

5 時半の MC で、7 時にバスは出発した。天気が心配されたが、何とか大丈夫そうであった。ドライバー兼ガイドは中年のバリーさん。元気のいい声で、ゴミや野性動物への注意を話した。年間 40 万人もの観光客が訪れるこの公園は、野生のままで保護されなければならないことが強調された。

前方の席は外人が占領し、中島さん、舞舞さんを含めたわれわれ 18 名の日本人は後方、僕は右側最後席となってしまった。ジョージ・パークス・ハイウェイを進んだが、カンティシュナまでの 145km を、たった 1 本の道路が走っているのみで、24km で未舗装となっていく。メナナ川を渡り、デナリ駅を越えてタイガの森を進んで行った。冬の間はエンジンのついた乗り物は公園内へ乗り入れ禁止ということで、つまり犬ぞりくらいしか入れないということである。

デナリとは現地語で“偉大なるもの”の意味で、四国と山口県を合わせた 2 万 4 千 km^2 にも及び、37 種の哺乳類、130 種の鳥類、14 種の魚類が生息しているという。標高が 1000m 前後で、ちょうど森林限界をはさんでいて、タイガとツンドラにまたがっている。今日は小雨だがデナリ公園は雨が少なく、年間雨量は 125 ミリ程度とのこと。もう少し標高が低かったら砂漠になっていたと考えられているという。米で 2 番目に古い公園で、今年で 90 周年になるという。

20 分ほど進むと、トウヒの木の中にヤナギが茂っているのが見られたが、この辺りはムースが多いというので、目を凝らして見回した。すると、親子のグリズリーベアが見えた！ブルーベリーを食べに来ているらしい。多くのバスが停車してその光景を見ていたが、人間なれ（バスなれ）してるのかなあ？



(いきなり親子のグリズリーベアが視界に入った。 ライチョウはアラスカの州鳥)

クマは2～3ツ子で生まれ、4歳で親離れし、その後は兄弟で2年程過ごしてからひとり立ちするというが、無事に成人できるのは15%しかないそうだ。1日に3万kcalを摂取するとのこと。

サベージ川を越えると24km地点で、これより先、一般車は通行禁止。橋の左側は氷河によってできた緩やかな丘陵で、右手は川の侵食によるV字谷。若い女のレンジャーがバスに乗り込んできて、安全の確認をした。この先はジャリ道となった。

少し進むと右手の山の中腹に2頭のドール・シープ（野生の白い羊）が、続いてスノーシューヘア（カンジキウサギ）、アラスカの州鳥のライチョウが顔を出した。ゴールドラッシュで集まる人々の腹を満たすためにドール・シープが乱獲されてしまったが、彼らを守るためにこの地域が国立公園とされ、当初はマッキンリー国立公園という名称でスタートし、後にデナリに変更となったそうだ。ドール・シープの名はウィリアム・ドールという動物学者の名が由来になっているという。

続いて数頭のカリブーが見えたが、アラスカには160万頭のカリブーがいて、公園内では大きな群れは作らないとのこと。英語では羊の角はホーン（中が空洞）、鹿の角はアントラー（中が毛細血管で満たされている）と呼び分けるそうだ。暑い日はカリブーの周囲に蚊が集まるので、涼しいところを求めて、雪があるような場所に移動するという説明があった。



(斜面にはカリブーも)

テクラニカ川（水が少なく砂利が多い川の意）の見える所でトイレ休憩後、8時55分、バリーのジョークに続いて出発した。



(デナリ公園内にはたくさんの川が流れている。テクラニカ川休憩所から望む)



(陽気なバリーはジョークも冴えていた)

(間近で見るクマは迫力があつた！)

10 分ほど走ると、右手のイグルー山の山肌に 4 頭のドール・シープが小さな点のように見えたが、彼らはオオカミやグリズリーベアから身を守るために高い所に棲息しているという。左手の山はカテドラル山という名前だそう。

イグルークリークやヤナギの木にあるロビン（コマドリ）の巣などを見ながら、9 時 30 分にセーブル・パスという峠に到達した。標高 1800m で天気がよければマッキンリーも見えるというが、残念ながら雲に隠れてしまっていた。この辺りは熊が多くて『熊に注意』の木看板があつたが、熊によってかじられていた。すると 400kg はあろうかと思われる大きいグリズリーベアが目に入った。バスの右手すぐ脇に出現した熊と偶然にも目が合ってしまい、思わず“ストップ”と叫んでしまった。

左手のイーストフォークリバーの畔の小屋は犬ゾリの休憩所になっていることだが、かつてアドルフ・ミュラーという研究者が、この小屋に籠ってオオカミの研究をしたことで有名ということであった。オオカミは主に大型の獲物に依存するため、狩猟するには群れの形態が有利なのだということである（マッキンリー山のオカミ）。また、オオカミは弱くて若い羊を襲うので、結果として羊は強い子孫が残せるのでオオカミが多くても羊の数は減少しないという説明も付け加えられた。

バスはゆっくりとポリクローム・パス（極彩色の峠）を登っていった。氷河によって削り取られた地層が、様々な彩りを呈していることから名づけられたようだ。バスの駐車スペースがないので帰路に停車することにし、バスはそのまま進んだ。左手下方に広がる広大なムーリーの平原を見下ろすと、氷河の重みでできた窪みに水が溜まって生じたキャトル・ポンドという池が、緑の中でミラーのように輝いていた。

左サイドにトクラット川の緩やかなカーブを眺めていると、公園の入口から80kmまで進んで来たという説明があり、間も無く、10時45分にトクラット川の休憩所に到着した。食物をこぼしたり落としたりしないよう、バリーからは公園の環境保全についての厳しい注意があり、それに従って、バスの横から給湯してもらってティー・ブレイクとなった。プレハブのおみやげ店の中には、大きなムースの角が展示されていたが、15kgもあってかなりズシリと重かった。左右だと30kgにもなってムース自身、かなりの重さを感じるのではないかと思われた。実際、角はオスのみで、交尾が終わると片方ずつ落ちてしまい、その残骸はリス等のげっ歯類のエサ（カルシウム源）となるという。ムースはオス1頭に対してメス3～4頭の割合で存在し、大きいものは700kgにもなるそうだ。



（ムースの角は片方だけでも重かった～！ カリブーは左右一対になっていた）

外のベンチの上にもカリブーの角が置かれていていた。川の水は氷河の溶けたものを含むグレーでいかに濁流という感じであった。



（瀬を早み 溶けた氷河の濁流の トクラット川は ちょっとヒンヤリ）

11 時 10 分まで休憩となり、バスは来た道を引き返して進んだ。陽射しが出てきて青空が見えてきた。立ち枯れているトウヒの木がすぐに目に入ってきたが、1930 年代の厳しい冬にヤマアラシによってトウヒの皮を齧りつくされてしまったからだという。

ポリクローム・パスのミューリーの平原が見渡せる展望台で 15 分ほど休憩となった。北極地リスが出てきて、愛嬌をふりまいていたが、体温 0℃、心拍数も 1 分間に 1 回くらいの仮死状態になって冬眠するという。



(ミューリーの平原にて バリーのジョークにはちょっと閉口した！)



(北極地リスのお立ち芸)



(イーストフォークリバー)

再びイーストフォークリバーにと犬ゾリの休憩所・ミューリーの小屋が見えてきたが、デナリ公園内には、現在、100 頭くらいのオオカミが存在しており、カリブー等が増え過ぎるのを防ぐ役割をしているとのことであった。その後はクマヤカリブー等を見ながらバスはゆっくりと進み、13 時 50 分にサベージ川の橋に戻って、再び舗装した道路に入った。その手前では酔っ払った森 **drunken forest** についての説明があった。永久凍土によって根が張れないため、夏の気温で緩んでしまっ様々の方向に木が酔っ払ったように傾いていることからの命名とか。

1923 年、アラスカ鉄道が完成した年に、当時のハーディング大統領が大統領として初めてアラスカを訪問したが、その時に夫人と愛人が鉢合わせになってしまったという。そして帰りのフライトで大統領が食中毒になり死亡してしま

ったことから、夫人の毒殺説も出たということであった。三角関係は怖いですね〜。バスの前方に陣取った外人グループを、14 時 30 分に山の中腹にある緑の屋根のホテルで降ろしてから昼食となった。カニコロックをおかずに、ビールが美味かった。

その後、舞舞さん達の会社のユニフォームとなっている白いトレーナーを買うために、われわれのホテルの少し先にあるホテルの売店で買物をしてから、16 時半頃にホテルに戻った。

少し休憩した後、18 時にロビーに集合してマイクロバスでデナリ・エアーに向かった。少し待たされたが、19 時 17 分に **take off**。僕はパイロットの右側の副操縦士の席に座ったが、このメタボのパイロットが虚血性心疾患か何かで急に倒れたりしたら、僕が操縦桿を握らなければ…と考えて、必死に操縦の様子を見ていた。森や川が次第に小さく見え、チョット厚めの雲を抜けると、頭を雲の上に出してマッキンリーが美しく見えた！



(小型飛行機はちょっと頼り無かった) (この右の席に座ったので、迫力満点！)

雲海からそそり立つマッキンリーの頂きは神秘的で、青い空に白のコントラストが素晴らしく、将に絶景と呼ぶに相応しいと思った。



(砂利の滑走路を突っ走り、雲を抜けると眩しいくらい青空が広がった)

太平洋プレートと北米プレートの作用により、アラスカも地震が多いということだが、6194mのマッキンリー山は年間 1mm ずつ高くなっているということである。



(この景色を見るだけでも、アラスカに来た価値は十分にあると思った。感動した！)

興奮しながら帰路に着き、20 時 40 分にホテルに戻ると、遠くから中島さんが『どうでした?』と合図をしたので『バッチリ!』と返すと、彼女はとてもはしゃいで喜んでくれた。興奮冷めやらぬ中で遅めの夕食となった。チキンはあまり美味しくなかったが、アラスカに来て美しいマッキンリーを間近に拝めた達成感でお腹も一杯であった。

朝が早かったので、部屋に戻ると 23 時には就寝した。

8 月 16 日 (木) 曇り

朝食を済ませ 7 時 50 分にロビーに集合し、ホテルのバスで近くにある湖ホースシュー・レイクに向かった。デナリ・パーク・ロードを少し入ったデナリ公園駅のそばで降ろされて線路を歩いていると、突然、アラスカ鉄道の電車が走ってきたのにはビックリしたが、ゆっくりとした汽笛とともに粛々と通り過ぎて行った。



(アラスカ鉄道の線路は針葉樹林の中へ続いていた)

ちょっとヒンヤリと感じる小道を 10 分ほど進むと、木々の間にホースシュー・レイクが見下ろせたが、名前の通り蹄鉄のような形をした小さくて静かな湖であった。湖畔まで下って行くとビーバーの巣を発見したが、ビーバーを発見することはできなかった。われわれの他はほとんど観光客がおらず、静かで

ちょっと幻想的な湖を一周してみようと思ったが、道が途絶えていたので途中で引き返し、巡回バスでホテルに戻った。



(ホースシュー・レイクの湖畔と湖を見下ろす径から)



(湖の散策をしたグループ写真～餅田さん撮影)

11時15分にロビーに集合して、バスでデナリ公園駅に向かった。駅は観光客で大そう混雑していた。12時5分になるとアラスカ鉄道の列車がホームに入ってきた。先ほどみたものに比べ、展望車加わっていた分立派に見えた。12時35分に出発した。



(デナリ公園駅は観光客で溢れていた。悠然と列車が入線してきた)

14時少し前にサンドウィッチの軽食を済ませると、後は8時間にも及ぶ、ゆ

ったりとしたアラスカ鉄道の旅を楽しんだ。14 時 45 分にハリケーン溪谷を通過したが、コンダクターの TAMI ちゃんをからかったり、ロスから来たメタボの夫婦（ご主人は数学の教師で奥さんはシスター）やその友達というノースカロライナ大学医学部に勤務している方と話したりして楽しい時間を過ごした。



（雄大なハリケーン溪谷と美しい車窓の風景）

ヤナギランの白い綿毛が飛んで流れていく風景は、幻想的であった。16 時 40 分にタルキートナの駅に停止した。



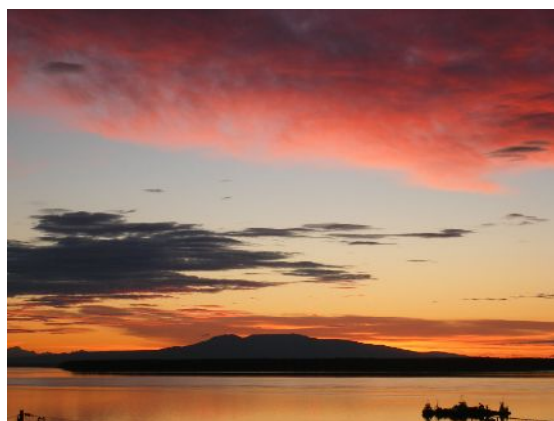
（タルキートナではシトナ川ボートクルーズの発着所やマッキンリーの雄姿も眺めることができた）



（開放的な展望車ではフレンドリーに過ごし、TAMI ちゃんとも仲良くなった！）

20 年ちょっと前、僕が大学院生時代にノースカロライナ大学に行ったことを話

すと、バスケットのマイケル・ジョーダンや近くにある名門のデューク大学等にも話題が及んだ（確かニクソン元大統領はデュークのロースクール出身だったとか・・・）。ノースカロライナの夏は死にそうに暑いので、アラスカは快適ということであった。彼女は感慨深げに “World is small” と言って頷いていた。



（UNC の神経学講座にいるという） （アンカレッジの夕焼けもベリーグッド！）

TAMI ちゃんからは、彼女が撮影したマッキンリーを始めとするアラスカのアルバムを見せてもらったが、カメラはニコン、車はカローラということであった。また、毎年 7 月に行われているタルキートナのムース・フェスティバルについて説明されたが、中島さん共々ちょっと理解できず絵を描いて説明してもらう羽目になった（爆）。

19 時 50 分にアンカレッジの駅に到着したが、陽はまだまだ高く、高緯度の土地にいたことが再確認できた。20 時 20 分にホテルに集合し、21 時よりシーフードのトマトソースの夕食となった。ちょっと酸っぱめで、餅田さんはノーサンキューで、代わりにステーキを召し上がっていた。

食後はレストランの屋上から、美しい夕焼けを堪能した。モロッコの夕焼けも凄かったけど、空気が澄んでいるからなのであろうか（もしそうなら日本ではちょっとムリかな？）。

絵はがきを書いたりして 0 時半頃には就寝したが、1 時間ほどすると部屋に響き渡る ‘キーン’ というストレンジな音が気になって目が覚めてしまった。フロントに TEL すると 15 分程で作業服を着た男が現れ、室内になるスチームを点検し、設備が古いので仕方が無いということであったが、文句を言って部屋のチェンジをお願いした。今日は満室で空いてる部屋が無いとのことであったが、少し粘ると、結局、3 時少し前に 961 号室から 1170 号室に移れ、ベッドもツインからダブルとなって、しっかり安眠することができた。アンカレッジのヒルトンはちょっと古めの感じがしたが、まさかこんなトラブルに見舞われるなんて・・・。

8月17日（金） 晴れのち曇り、夕方から一時小雨

10時出発ということで、ゆっくりと朝食も摂れて昨夜のトラブルもノープロブレムとなった。

快晴の下、バスは景色のよいハイウェイを東南に向かって進んでいった。右側にはクック湾、左側には道路に沿ってアラスカ鉄道の線路が併走し、その後はチュガッチ山脈へと続いていた。一路、氷河クルーズの発着地であるウィティアーを目指したが、クック湾は次第に狭くなってターンアゲイン入江と名前を変えていった。かつてキャプテン・クックが湾をそのまま進めば、再び太平洋に出られると思っていたところが行き止まりになり、仕方なくそこで船をUターンさせたことからターンアゲインという名前が付けられたという。この入江にはボア・タイトと呼ばれる高波も発生するという。

チュガッチの雨が多いという意味についてだが、東南アラスカは年間4千ミリもの降雨量があり、これは南米アマゾンに匹敵し、州都ジュノーは年間365日の半分は雨であるという。1万5千年前（最後の氷河期）にアラスカとシベリアとの間に存在したベーリング陸橋（地峡）はオーストラリア大陸がすっぽり入るほどの大きさであったが、マンモス等とともにアジアからアサバスカン・インディアンがアラスカにやって来た。デナリ等にもこの足跡が確認され、南方に移動してアメリカン・インディアンに、さらに南下して南米へと進んで行ったという。

ベルーガ・ポイントには数台の車が止まっていたが、この辺りはベルーガが定住していることで知られているそうだ。

1800年代、ロシア人がまずアリューシャンに住み着き、毛皮目的でラッコを乱獲したため、1800年代後半になると毛皮が取れなくなってしまった。さらにクリミア戦争が勃発したことで、資金的に苦しくなったロシアは1867年、アメリカに720万ドルで売却したという。日本ではちょうど明治維新の頃であったが、当時の国家予算の半分も費やす買い物に、『スワードの冷蔵庫 or 動物園』とスワード国務長官が国民から酷評されたそうだが、18世紀後半になってゴールドラッシュが起り、アラスカに人々が集まるようになって、アラスカ経済の基盤が確立したという。そして1915年から1923年に掛けて、800kmに及ぶアラスカ鉄道が建設され、第2次世界大戦が始まると、多くの軍事施設が建造されていった。

さらに、1968年には北極海沿いのプルドベイで石油が発見されたことでオイルラッシュが起き、バルディーズまでのパイプラインが建設されたが、これは万里の頂上に次ぐ、2番目の人工建造物だそうだ。このパイプラインは全長1300キロに及び、10万本の鉄製にパイプが使用されているが、これらは made in Japan ということであった。

10 時 50 分に、アラスカの語源となったアリエスカ氷河が見えたが、アラスカの 5%が氷河で、アラスカ山脈の北を越えると氷河は見られなくなり、過去 100 年で平均気温が 0.5℃上昇し、温暖化によって氷河の崩壊（後退）がみられるという。氷河には 3 つのタイプがあって、①先端が海に着いている～海洋氷河。②海から少し後退して扇状になっている～谷氷河。③さらに後退して山の上にぶら下がっている～懸垂氷河。ということである。

11 時 15 分にポーテージ湖畔で写真休憩があったが、この湖は 100 年前までは氷河に覆われていたそうだ。



（ポーテージ湖畔からの風景）

ウィティアーの手前には急峻な岩山がそびえ、そこを抜けるには 1 時間に 14 分しか開かないトンネル（アントン・アンダーソン・メモリアル・トンネル）を抜けるのだが、数年前までこのトンネルを通れるのは列車だけで、車を降りて列車でトンネルを通ったそうだ。11 時半過ぎに 4 km に及ぶこのトンネルを抜け、氷河クルーズの発着地となっているウィティアーに到着した。

後の英国王ウィリアム四世に因んでキャプテン・クックによって命名されたプリンス・ウィリアム湾に面したウィティアーは静かで右手の山の中腹にある大きなマンションに町の人口の 8 割にも当たる住民が住んでいるということである。



12 時 35 分まで自由行動ということで、おみやげ用のスモークサーモン（copper river salmon）を購入したり、子供が釣りをするのを眺めたりして過

ごした。“Jelly fish！”と子供が叫んでいたが、こんな冷たい海にもクラゲがいるんだなあ・・・。

13 時からの 26 氷河クルーズ船に乗り込んだが、この奥部はパシフィック鉄道の創始者であるエドワード・ハリマンが大学の学者をアラスカに招いたときに、学者たちの大学の名前を氷河に命名したことからカレッジ・フィヨルドと呼ばれている。10 分ほど進むと 10 時の方向にビリング氷河が見えた。海に浮かんだ黒い点のようにラッコも見えてきた。

さらに少し進むと右手にテベンコフ氷河が見えてきたが、Glacier blue が美しかった。船は順調に進んで行き、エール氷河、ハーバード氷河、プリン・モア氷河と続いて巡った。



(ハーバード氷河は幅 2km、奥行き 45km、高さ 12m、深さは 100m もあるという)

ハーバード氷河の辺りの海は Glacier blue によって少し青みがかかっているが、少し進むとブルーグレーのちょっと濁った色に戻った。

ラッコの他にゴマフアザラシが氷の上に休んでいるのが見られたが、シャチ等から身を守るためだという。シャチは身体にキズがつくのを恐れて、このような氷の多いところには来ないのということである。このような冷たい海に生息しているアザラシなのだから、多摩川あたりに迷い込んでくるのは可哀想に思った。

カレッジ・フィヨルドの奥から引き返すと、左手にウィリアム氷河、アムハ

ースト氷河クレセント氷河を見ながら進んだ。13 時 50 分から白身魚のフリッターのランチを摂った後に、デッキに出て写真を撮ったが、もの凄い風で上手くシャッターが切れたか心配になる程であった。ノルウェーのフィヨルド・クルーズに比べると、アラスカのそれはずっとワイルドな感じであった。



(もの凄い風だった！ 上向きに泳いでいるラッコはかわいかった。)

クリスマス・カードや年賀状用のプラカードが船尾においてあり、それを掲げて氷河をバックに撮影をした。これは来年の年賀状になります！



(来年の年賀状を作成した。クルーが海に落ちないか、ちょっと心配した。)

船尾からクルーが何とか氷河をゲットしてくれ、その氷でオン・ザ・ロックを楽しむことができた。船内ではウィスキーのミニボトルが売られており、商売上手といった感じがした！ウィスキーを注ぐと 2000 年前の氷から気泡の弾ける音が“シュワッ”と響いてきて、2000 年の歴史と封印された重みのある

味わいを感じた。



(氷河の氷で飲むカティーサークのオン・ザ・ロックはまいう～！)

氷の上に都鳥の群れがいたが、『名にし負わば いざ言問わむ都鳥 わが思う人は ありやなしやと』と伊勢の東下りを思い出した。「舟こぞりて泣きにけり」とはならなかったが、何となく優雅な気持ちになった。都鳥ってゆりかもめのことだよ、と中島さんと舞舞さんに教えてあげたら、二人ともちょっと驚いていたようだった。

船はベイカー氷河、デタッチ氷河、崩壊が著しいサブライズ氷河等を巡って進んでいったが、次第に天気が怪しくなってきた。そんな中、クルーがラッコの毛皮を持ってきて触らせてくれたが、1cm 四方に 14 万本もの毛があつて、これだけで人間の体毛すべてと同じくらいということで、とってもしっとりしていた。乱獲されてしまったのも分かるような気がした。

右手の滝の辺りはミツユビカモメの巣になっているというが、無数のカモメが崖にへばりついていて、ここでもう一種、伊勢の東下りの歌を思い出して嬉しくなってしまった。日本の古典文学って、心を豊かにする力を持っているんだなあ……。『から衣 きつつなれにし つましあれば はるばるきぬる 旅をしぞ思う』

4時間半のクルーズを終えて、17時半過ぎにウィティアの港に着岸すると、小雨でガスがかかっていた。18時のトンネルを抜けて進んだが、ウィスキーの酔いが廻ってきて、しばしグッスリ眠ってしまった。舞舞さんのベルーガジラの群れが見える、というアナウンスで目覚めると、ベルーガポイントの辺りに白く丸まったベルーガの背中を見ることができた。

アンカレッジに戻り、アラスカ最後の夕食は Tokyo Garden というレストランで和食のバイキングであった。韓国人が経営する和食店ということで、味は今いちであったが、アンカレッジには 3000 人ものコリアン（日本人は 300 人）が居住しているという。舞舞さんによると、納豆も 3 パック \$ 2 くらいで売られているとのこと。



(コリアンが経営する和食レストランと明け方のアンカレッジの市街)

20 時 50 分頃ホテルに戻ると、氷河クルーズに参加されず釣りに行かれた餅田さんにエレベーター前でであつた。釣果はサケ 4 匹とのこと。こちらの竿はシャフトが軟らかいので、ちょっと勝手が違ったとのことであつた。

冷たい小雨が降っていたので、部屋に戻って傘をとり、おみやげを買いに市街を散策した。定番のスモークサーモン等を購入した。

8 月 18 日 (土) 雨、曇り

5 時の MC を取って、部屋で軽食を済ませ、いそいそと仕度をして 6 時出発のバスに乗り込んだ。中島さんからは、くれぐれもスーツケースにはカギを掛けないよう注意があつた。舞舞さんから搭乗の手続の説明を受けていると、あつという間に空港に到着してしまった。

9 時出発の JL8801 便は 2 階席に座れて、ちょっとゆったりできた。日付変更線を越えて 8 月 19 日 (日) の朝、成田に到着となった。カルーセルのところで皆さんに御礼を言った後、スカイライナーに乗車してお昼前には帰宅した。流石に日本は暑く、20℃以上の温度差はきつい～。

アラスカは期待以上のものがあり、天候にも恵まれて、とてもエンジョイできた旅行となった。アラスカの猛々しい自然と予想以上の涼風は、心と身体を十分に癒してくれた。素晴らしかった！ お薦めですね(^^)v

あとがき

いつもなら帰国後 2～3 週間で書き上げる恒例の旅行記だが、今回は 8～9 月にかけていろいろなイベントが重なってしまい、2 ヶ月近くも要してしまった。自分でも読めないような汚い字のメモと、薄れ行く記憶との戦いとなった。デナリ公園をはじめとする自然保護に関する厳しいアラスカの規則や、崩壊(後退)しつつある氷河を目の当たりにすると、温暖化を防いで地球環境を守らなければならないと強く実感することができた。



(ツアコン&ガイドさん)